

## 重症妊娠悪阻の妊婦との関わりを通して

はじめに

つわりとは妊娠5週～6週頃から出現する悪心や嘔吐などの消化器系症状のことである。妊婦の50%～80%が経験し症状の多くは一過性で妊娠12週～16週頃までには自然に消失する。

しかし稀につわりの症状が悪化し治療が必要になるものがある。これを重症悪阻をいう。症状として食物の摂取困難による栄養障害・体重減少の他、様々な症状が出現する。一般的なつわりと比べ、全妊娠の1%～2%に発生する。

原因として、精神的要因が考えられ妊娠に・分娩に対する不安や、恐怖心、ストレスなどが関与していると言われている。

当院では、重症悪阻による治療で、IVHを行うことは稀である。今回重症悪阻よりIVHを行いながら入院生活を送った経産婦に話を聴くことができた。

今回の事例を通して今後の看護に活かせる個別性のある関わりについて検討する。

### I. 事例紹介

#### 1. 患者紹介

A氏、30歳代、経産婦

#### 2. 入院までの経過

1月26日悪阻症状軽度あるが仕事は可能。パンとミカンを食べることができていたが、受診の3～4日前より食事摂取できず2月1日受診

検査結果（入院時）

尿蛋白（1+）

尿蛋白（1+）

尿ケトン（3+）

ビリルビン（-）

#### 3. 入院期間

妊娠9週0日から妊娠17週6日

### II. 倫理的配慮

入院後、研究の趣旨を説明し、プライバシーを保護し、対象が特定されないこと、患者様の情報を研究以外に使用しないことを説明し同意を得た。

### III. 入院時の状態

Aさんは二人目が欲しいという思いがあり第二子妊娠がわかった時にはとても嬉しかったと言われた。しかし第一子の時にも悪阻による入院を経験しているため、またつわりはあるだろうという思いだったと言われる。

入院一週間前より悪阻症状として嘔気・嘔吐が続き食事摂取困難となり2月初旬入院される。入院してからは、絶食となり輸液による治療が行われた。悪阻症状は変わらず夕方になると症状が悪化するようだった。調子が良い時には飴を食べることができるようになった。一時的に調子が良くなるともう大丈夫かと思いき、再び悪阻症状が現れるとショックを受けられていた。

その後も症状が軽快せずIVHによる治療の話が出た時にはIVHは末期の人や栄養摂取困難な高齢者がするものだという考えがあり、まさか自分がするなんて・・・ととてもショックを受けておられた。

妊娠13週3日目にIVH挿入となり、IVH施行前にはエコーにて胎児チェックを行い、それを見て「これで気合いが入った」と言われるが不安は強く、終了後には「つわりより全然楽だ

った」と言われ、輸液開始後より表情も良くなり「気分が楽になりました。」と話された。

しかし輸液開始した翌日には「唾液が常に出てきてしんどい」という発言があり苦痛表情が見られた。その後も嘔気は継続し、嘔吐はなかったが唾液の分泌は活発で唾液を飲むだけで胃のむかつきがあった。

妊娠 14 週 4 日目には徐々に悪阻症状が落ち着いてくる。妊婦検診も問題なく、胎児の発育は順調であった。しかし体重が 1 週間で 2、3 kg 増加していた。体重増加について A さんとはとても気にされており翌日より輸液量減量となる。

妊娠 15 週 3 日目になると空腹感が出現し、「昼から何か食べられるかも」と言われたので栄養士にコンタクトをとり経口摂取を検討してもらうことになる。同日昼食よりパン・サラダが出るが、少量ずつ摂取できる。摂取後嘔気・嘔吐はなく表情も良い。

妊娠 17 週 0 日悪阻症状の悪化なく経過し、食欲も出て、食事摂取量増加してきたので IVH 抜去となる。その後常食も摂取良好となり外泊をした後に退院となった。

#### IV. 看護の実際

##### 1.

私が知覚したこと	私が考えたり感じたこと	私の言動	考察
① 2 週 4 日入院してから 4 週間が経過している。表情は暗くベッドに横になっている	② 元気なさそうだな・・・ 体調はまだ良くなさそう	③ 「調子はどうですか」	⑤に思ったが観察をするうえでだまかにせず、吐き気はどうですかなど細かく聞くようにしたらよかった。しんどい時に同じ質問をするのではなく各勤務で得た情報を活かして「ずっと続いていますね。しんどいですね」と伝えるようにしたらよかった。
④ 「変わらないです」	⑤ 変わらないっていつも聞くけど、私ならいつも同じことを聞かれても嫌かな。質問を変えてみよう	⑥ 「そうですか。ところでオリンピックのテレビみました」	話題を変えたことは気分転換になり、治療への意欲があることが確認できた。また、表情も暗かったのが明るくなるなど変化がわかった。
⑦ 表情良く「見ました。すごいですね。なんか勇気もらえました。」	⑧ 少し表情が良くなった。テレビの話をして良かった。	⑨ 「勇気もらえて良かったですですね。すごいプレッシャーかかりそうですね。」	しかし長時間話をしているか戸惑いながら接したため短時間で退室した。しんどい時にいくら話題を変えても長時間になると苦痛になるので短時間で退室してよかったと
⑩ 「本当ですよ。感心します。私も頑張らないと思っていました。」	⑪ 話題を変えたことで治療への意欲が聞けた。ずっと居てもいけんな。	⑫ 「そうですね。あまり無理をしないようにしましょうね。それでは失礼します。」	

			思う。
--	--	--	-----

2.

私が知覚したこと	私が考えたり感じたこと	私の言動	考察
<p>①IVH にて状態が落ち着いてきたので話を聞いた</p> <p>③「そうですね。入院した頃が一番つらかったです。吐いて、横になるとまた吐いて・・・がずっと続いていました。」</p> <p>⑥「眠れてないことはないです。むしろ眠れた時だけ吐くことがなかったです。」</p> <p>⑨『「また見に来ます』って言われても気になって寝てなかったりしましたね。看護師さんによっては早く点滴が終わることもあったし。」</p> <p>⑫「刺される時の痛みでつわりから気が紛れるので苦痛ではなかったです。」</p> <p>⑮「IVH は末期の人や栄養摂取困難な人がするものだという考えがありまさか自分がするなんて・・・とと</p>	<p>③ 吐き気が続けば寝ることもできないんじゃないかな</p> <p>⑦体も休まらないしつらいだろうな。スタッフが訪室する度どう思っていたのかな</p> <p>⑩点滴が気になって眠れんかった時もあったんだ。早く終わるようにしたら良かったな。けど度々訪室するのも悪いし・・・</p> <p>⑬点滴も苦痛のはずなのに刺される痛みで気が紛れるくらい、つわりが苦痛だったんだ</p> <p>⑯職業柄 IVH に対するイメージがあったんだ。そう思っていたら自分がするとわかった時は相当ショックだろうな</p>	<p>②「一番つらかった時期は入院してすぐの頃ですか」</p> <p>⑤「じゃあ入院した頃はあまり眠れなかったですか。」</p> <p>⑧「点滴の交換などで部屋に行ったら眠れんかったんじゃないですか。」</p> <p>⑪「点滴がなかなか終わらんこともあったし、刺し替えしたりして苦痛ではなかったですか。」</p> <p>⑭「そうでしたか。IVH の話が出た時どう思われました。」</p>	<p>嘔吐により休息が得られていなかったことがわかった。</p> <p>つまり A さんは健康な人が行う生活を送ることができていなかった。</p> <p>それを解消するためにも日中で点滴を終わらせることは A さんにとって夜間の休息の時間を確保するために必要な援助だったと思うが、実際は長時間点滴を行っていた。</p> <p>刺し替えなど A さんにとっては悪阻症状の苦しさから苦痛ではなかったということがわかり、悪阻症状の辛さに気づくことができた。</p> <p>IVH を行った際にもつわりより楽であったと言われたが、A さん自身で不安の解消のためにサイトなどで同じ経験をした人を探していたと考えられる。その結果</p>

<p>でもショックでした。」</p> <p>⑯「不安でしたね。ネットでいろんなサイトとか見て自分と同じような人はいるんだろうかと思いつながら見ていました。」</p> <p>⑰「いましたよ。IVH をして元気な赤ちゃんを産んだという人がいました。ここの病院では珍しいけど、大きな病院では、珍しくないことがわかりました。」</p>	<p>⑱初めての経験だし、サイトで調べるくらい不安に思われていたんだな。この病院ではあまりないことだし不安を解消するために自分なりに悪阻でIVH をする症例がないか調べて安心したのかな</p> <p>同じ経験をした人はいたのかな</p> <p>⑳A さんも少し安心したのではないかと思う。同じような経験をした人が一人でもいると気持ちが違うと思うな。同じような人の経験を知ることによって今の自分の状態を受け入れることができたのだと思う。</p>	<p>㉑「そうですよね。病院では高齢者ばかりするし、そういうイメージも湧きますよね。そんなイメージもあればIVH の時は不安でしたか」</p> <p>㉒「他にも同じ経験をした人はおられましたか。」</p>	<p>同じ経験者がいたことで A さんの不安も軽減したと言える。</p> <p>IVH をすることが不安で自分なりに情報を調べ、同じような人がいるとわかり安心された。このことは A さんの中で解決された問題だと思う。しかしながらより身近な私たち看護者がいろんな情報をもっと提供できていけばさらに安心することができたのではないかと思う。</p>
---	---	--	---

## 3.

私が知覚したこと	私が考えたり感じたこと	私の言動	考察
<p>②「入院してすぐの頃には誰とも話したくないと思っていました。『今日はどうですか』と聞かれても状態は変わらないのと、変わりませんというのが申し訳なかつたです。他の話をしてもらうと気分転換にもなって嬉しかったです。例えば今日の天気だったり症状とは違う事を話したりしてもらうと嬉しかったです。」</p>	<p>③いつも症状など同じことを聞くよりもこちらから普段のような会話をすると気持ちが違ったんだな。状態観察のための質問も A さんにとってはストレスになっていた可能性がある</p>	<p>①「入院中誰かと話したい気分になりましたか」</p>	<p>入院中を振り返り、同じ返事をすることに申し訳ないという気持ちや遠慮の気持ちがあったことがわかった。同じ質問をされるとそれがストレスになっていた可能性がある。</p> <p>その日の状況で症状の聞き方や会話を工夫すればよかった。</p>

## 4.

私が知覚したこと	私が考えたり感じたこと	私の言動	考察
<p>②「入院した頃が一番つらかったです。」</p> <p>⑤「動く度に嘔吐をして、トイレも我慢していました。」</p> <p>⑧「赤ちゃんがいなければこんなつらい思いをしなくて済むのに・・・と思ったことも一時期ありました。」</p> <p>⑪「妊婦検診の時にエコーを見て赤ちゃんが成長していることがわかってあんなこと思っ て悪かったと思っています。」</p> <p>⑭「エコーを見られることは嬉しいけど動くのもつらかった時は苦痛でした。」</p>	<p>③入院した頃が一番つらかったんだ。どんな風につらかったんだろう</p> <p>⑥トイレも我慢するくらい症状がつらかったんだな</p> <p>⑨妊娠が嬉しいと思う気持ちとつわりの症状がつらいと思う両方の気持ちの葛藤があったんだ</p> <p>⑫葛藤があったが、妊婦検診時のエコーを見たことによって子供の成長が確認でき A さんが前向きになった要因となってくれた</p>	<p>①「入院中一番つらかった時期はいつですか」</p> <p>④「どんな風につらかったですか」</p> <p>⑦「動く度に吐くと動けなくてつらいですね。トイレも我慢していたんですね。」</p> <p>⑩「そうでしたか。今はどうですか。」</p> <p>⑬「赤ちゃんの成長が実感できてよかったですね。エコーに行くのはつらくなかったですか。」</p>	<p>入院中一番つらかった時期は悪阻症状により自分の思うような行動をすることが困難であった。</p> <p>妊娠がわかった時には喜びがあったが、悪阻症状の増悪に伴い自分中心の考えになりアンビバレンスな感情が出現していたことがわかった。しかしこの感情は妊婦検診時のエコーにより胎児の成長を確認できたことで解消できたと言える。</p> <p>しかし、エコーを行っても体調が悪い時には本人にとっては苦痛な行為でしかないと言える。胎児の観察のために必要なことだが、可能であれば A さんの症状に応じて移動が困難な場合は病棟でお願いするなど配慮したり苦痛の緩和につなげる必要がある。</p> <p>話を聴いて、症状にばかり注目しており、ストレスなどの精神的な影響について話を聴くとよかったと思う。</p>

## V. 考察

今回Aさんと関わることができたのは限られた時間だったが、入院中関わった場面と退院後当時の場面を振り返り比較することができた。

悪阻により IVH を行うケースは稀で A さん自身も初めての経験であった。悪阻症状は人により様々であるが、A さんの場合は点滴を何度も刺し替えると気が紛れるので苦痛ではなかったと思うくらい悪阻の症状が苦痛だったことが理解できた。

入院中には悪阻症状もひどく、私自身訪室することにためらい遠慮し、戸惑いながら関わった。しかし A さんもスタッフに気を遣うことも多く、同じ質問をされることが苦痛だったとわかり A さんの思いを受け止めて状態に合わせたコミュニケーションの取り方や質問の仕方を考えて訪室しなければいけないと思った。新道らは「助産婦が妊婦の話に耳を傾ける機会を設け、妊婦のアンビバレンスな感情を引き出すことができれば、そのような感情は軽減し、つわりという身体的反応に対する心理的負荷を軽減し、つわり症状自体を軽減させることもできる<sup>1)</sup>」と述べており、話を聴くことは症状軽減のための方法の一つと言え、助産師だけでなく看護師にも共通して言えることである。しかし聴くことが重複するとストレスの原因となる可能性があるため注意しなければならない。

退院後に話を聴いた時は、入院中聴けなかった思いを聴くことができた。

場面4ではアンビバレンスな感情があったが、エコーを見て、胎児の成長を確認したことで感情だ落ち着いた。行田らは「つわりの時期に超音波の胎児映像を見ることによって妊婦は視覚的に我が子を実感し、感動しかわいいと思うようになりつわりを乗り越ろうとしていると考えられる」と述べており、A さんにとってもエコーを見たことはつわりを乗り越えるための意識付けになったと言えるが、A さんの状況に合わせて行う場所を選ぶとさらに良かったと思う

以上のことから 患者の話を聴く時間を設け、不安な

どの感情の表出を促すことや、つわりを乗り越えるためにエコーなどを用いていくことは身体的・精神的援助につながると言える。

## VI. おわりに

今回 IVH による治療を行った妊婦と関わり、自分の関わりの浅さを痛感したが振り返りながらコミュニケーションの大切さや情報を活かす看護からケアにつなげる必要性を学ぶことができた。この学びを今後の看護に活かしていきたいと思う。

### 引用文献

- 1) 新道幸恵、和田サヨ子：母性の心理社会的側面と看護ケア，医学書院，1996，P 3
- 2) 行田智子：妊婦各階における妊婦の体験や感じていること，日本母性衛生学会，2001

### 参考文献

- 1) 市川潤：妊婦のこころの動き その理解と看護，医学書院，1990
- 2) 村本淳子・高橋真理編：ウィメンズヘルス ナーシング 周産期ナーシング，NOUVELLE HIROKAWA，2005